KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ホワイトヘッドのコスモロジーにおける累積性について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): ホワイトヘッド, コスモロジー, 自然 キーワード (En): 作成者: 平田, 一郎 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00006062

関西外国語大学 研究論集 第99号（2014年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.99（March 2014）

ホワイトヘッドのコスモロジーにおける累積性について

平　田　一　郎

要　旨

ホワイトヘッドのコスモロジーの大きな特徴は累積性にある。即ちその究極的構成要素たる現実的存在は、その生成が終わったとしても宇宙から消え去るのではない。むしろその上に新たな現実的存在が積み重なっていく。

こういった累積性はコスモロジーの対象たる宇宙の要素についてのみ言われるわけではない。むしろコスモロジーの探究そのものについても言われる。その点で累積性は自己言及的である。そしてこのコスモロジーの探究そのもの累積性は、フォードの「構成的分析」の評価においても有効である。

さらにコスモロジーの対象たる現実的存在には空間的累積性もある。これはウォラックのあらゆるものが現実的存在と見なせるという解釈に一致するが、それゆえサブアトミックな存在の上に、分子、細胞等々と重なる。それら全てを現実的存在と見なせるところに、コスモロジーがコスモロジーである所似となるミクロコスモスとマクロコスモスの対応がある。

キーワード：ホワイトヘッド、コスモロジー、自然

１．累積性（accumulative character）

ホワイトヘッドのコスモロジーの特徴の一つに宇宙の累積性がある。それは究極者の範疇（the category of the Ultimate）である、「一」（one）、「多」（many）、「創造性」（creativity）から生じる。ここで究極者の範疇とはこの宇宙に存在するものやそれに対する制約などにおいて前提とされている普遍的な原理を表わす。それは宇宙のありとあらゆるものやその在り方を最も普遍的に特徴づけたものと言える。そこにおいて「一」とは「存在（an entity）の単数性（singularity）を表わしている」（*PR* 21[1)]）一方、「『多』は『選言的な多様性』（disjunctive diversity）という概念を伝えている。この概念は『在るもの』（being）の概念における本質的な要素である」（*PR* 21）。これは、個々のものが別々に様々な在り方で在るというのである。そして「多は一になり、一によって増加させられる」（*PR* 21）。即ち多くの在るものはある一つものに統一されるが、その統一において統一された多くの在るものが抹消されるのでなく、むしろその多くの在るものに統一されるものが加わって、在るものは全体として増加する。

この増加を引き起こす、即ち多くの在るものを統一して、統一したものを元の多くのものに付加するのが「創造性」である。これは「『創造性』は選言的に宇宙であるところの多の内容に、新しさを導入する」（*PR* 21）ということでもある。なぜなら統一されたものは、それまで存在している多くの在るものと異なる「新しい在るもの」だからである。そして「その新しい存在は、それが見出す『多』の共在性（togetherness）であると同時に、またそれが変化を与えずそのままにしている選言的な『多』の間の一である」（*PR* 21）。即ちこの新しい在るものはそれまでにあった多くの在るものと一緒になって宇宙を構成すると共に、それまでに在った多くのものと並ぶ、宇宙の一要素となる。この新しい存在が、「多」に付け加えられた「一」、宇宙を増加する「一」なのである。そして多に一が付け加えられて増加するとは、それまでに在った多くのものに新たに生じた一つのものが積み重なるとも言える。即ち宇宙においては在るものは累積していくのであり、それを宇宙の累積性と言ってもよい。

しかしここでの「究極者」とは、あくまでも現に存在するものから抽象された普遍的原理であって、それ自身としてこの宇宙に存在するものではない。それらがある機会に具体化したもの（accidental embodiments）のみが現に存在する。この現に存在するものこそ、「現実的存在」（actual entity）である。「『現実的存在』―『現実的生起』（actual occasions）とも称される―は、世界がそれから構成される究極的な実在である」（*PR* 18）。現実的存在は創造性の被造物である。神さえも非時間的な現実的存在であって被造物なのである。もっともそういった神は存在（an entity）であっても、生起（an occasion）とは呼ばれない。そして一つの現実的生起（神以外の通常の現実的存在）は、神を含む多くの現実的存在から創造される。即ち「多」から「一」の新たな創造である。言いかえれば現実的存在こそ、多から新たに創造された一なのである。そして神を除くこれらの存在の「多」が「多岐性」（multiplicity）と呼ばれる。「多岐性」とは多くの存在するものが別々にしかし同じ宇宙の一要素としてあるということである。ただし神だけは通常の在るものと並んで同じように存在しているわけではない。ともかくそれゆえ「一つの現実的存在に絶対的に原初的な所与となっている『宇宙』は多岐性である」（*PR* 30）。即ち一つの現実的存在は、それまでに存在している多くの在るもの―それら自身もまた現実的存在である―からなる宇宙から生じるが、そういった宇宙はまさに多くの在るものが別々に、しかしそれぞれが宇宙の一要素として存在している。

他方、そういった現実的存在が生成して最終的にどうなるかということについてホワイトヘッドは言う。

> 現実的存在は主体的には（subjectively）「永劫に消え去る」（perpetually perish）が、客体的には（objectively）不滅（immortal）である。現実態（an actuality）[現実的存在] は消滅する時に主体的直接性（subjective immediacy）を失う一方、客体性（objectivity）

を獲得する。(*PR* 29)

即ち、現実的存在は何らかの活動する主体としてはその活動を止める。つまりある直接的で現に活動しているものとしては、もはや活動しているものではなくなる。しかし客体として、即ち他の現実的存在の生成の材料としては存在し続けるのであって、活動を止めたからといって消え去るのではない。それが「客体的に不滅」ということの意味である。これは多が一によって増加する、即ち新たな一ができた時にその材料となった多は消滅せず、むしろその多に一が積み重なるという、究極者の範疇で言われた普遍的な原理の具体的な在り方を示している。ともかくこのようにして現実的存在は「客体的不滅性」(objective immortality)を獲得する。そして「その［現実的存在の創造の］達成はその過程を停止させ、その結果それは、超越によって達成しうる、新しい客体的条件として限定された豊かさに追加される客体的不滅性に移行し、宇宙の『実在的可能態』(real potentiality)となる」(*PR* 223)。現実的存在が活動を止め次の新たな現実的存在の創造の材料となる事をホワイトヘッドはその活動を超越すると言い、そしてそういった材料は新たな現実的存在の創造の可能性であるがゆえに「可能態」という。

ここで「実在的」(real)と称するのは、現実に存在していたものが可能態となったためそう言われるのであって、最初から可能態としてのみ、あるいは可能態としてしか存在できないという「純粋な可能態」(pure potentiality)とは区別されている。例えば色は何かある具体的なものの性質としてのみ存在してそれ自身としては存在しない。「赤い服」は存在するが「赤そのもの」はこの世界には存在しない。こういった「赤そのもの」のようなものを「純粋な可能態」と称し、「永遠的客体」(eternal object)とホワイトヘッドは名づける。

ともかくそれゆえ客体的不滅性を獲得した新たな現実的存在は宇宙に付け加えられる。ホワイトヘッドは言う。「個々の新しい現実態は共同して新しい条件を追加するものである。新しい条件はどれも、追加された豊かな達成物に吸収される」(*PR* 223)。ここで「追加された」(additional)ということに注意せねばならない。新たな現実態、即ち現実的存在は、古い多くの存在(客体的不滅性を獲得したそれ以前に生成した多くの現実的存在)を否定しないし、またこれら多くの存在は新しい存在になって無くなってしまうということもない。新たな現実的存在は多くの存在に追加されるのである。これら多くの存在の多岐性に関して「創造的な働き［現実的存在を生成する働き］は、常に自己経験の特殊な統一において一つになる宇宙であり、そしてそれによって多としての宇宙である多岐性に付加される」(*PR* 57)。現実的存在の生成は、その現実的存在それ自身にとってはある種の自己経験であり、所与としての多なる存在を統一して一つになるのであるが、同時にそれはそれまでの多なる宇宙に追加される。

この現実的存在の生成という創造的な働きはまた「決断」(decision)とも称される。現実的生起の創造にはかつて現実的存在であり消滅して客体的不滅性を持った多なる存在と共に、神

が現実的存在の一つとして関わってくる。この神の関わりについて、ホワイトヘッドは言う。

> あらゆるそのような決断―神の本性の決断とあらゆる生起［神以外の現実的生起］の決断の最終的累積（the final accumulation）は、歴史における諸形相（forms）の流れの特別な要素を構成する（*PR* 47）。

ここでホワイトヘッドは、神と神以外のあらゆる生起から新たに生成した一つの現実的存在が宇宙に累積（accumulation）されるということをはっきりと語っている。

2．自己言及（self reference）

現実的存在に関してはさらに注意すべき多くのことがある。第一に、それは現存の範疇（categories of existence）に属する範疇である。「あらゆる存在（entity）は現存の範疇のある特殊な事例でなければならない」（*PR* 20）。それがどのような存在の特殊な事例と見なされる、即ちどのような存在に適用されようとも、ともかく現実的存在はある存在に適用されるのであって存在それ自身ではない。

第二に、「各々の現実的存在は所与から生じる経験の活動（act of experience）と考えられる」（*PR* 20）。既に現実的存在の生成を自己経験と称したり、活動の主体と見なすという言い方をしてきたが、現実的存在は活動、即ち生起、「こと」であって、「もの」ではない。「机」というものがあるのではなく、「ここに机がある」という活動があるのであり、言いかえれば「机があること」という「こと」があるのである[2)]。

しかしここで第三の問題、現実的存在を「経験の活動」という時の「経験」が問題となる。ホワイトヘッドにとって経験の典型が人間経験（human experience）であることは事実である。

> 一つの現実的生起の諸能力を記述する時、それが実現されるか否かいずれにせよ、われわれはロックと共に、人間経験を形而上学にとって必要とされる普遍化された記述が基づく実例であると暗黙の内にみなしている（*PR* 112）

他方「神は現実的存在である。そしてはるか離れた空虚な空間におけるもっともちっぽけな一吹きの存在もまた現実的存在である」（*PR* 18）。それゆえ神も、ちっぽけな一吹きの存在もまた何らかの経験を有することになる。この場合、存在のあり方の両極端をを示すことで、その中間の種々の事物、即ち宇宙のもの全てが現実的存在であるということを意味しているのは明らかであろう。しかしわれわれ死すべき人間は、神の経験など理解できるのであろうか。それ

以上に、生物でさえない「一吹きの存在」の経験とは何であろうか。ここにホワイトヘッドのコスモロジーにおける「汎主体主義」（pansubjectivism）あるいは「汎心論」（panpsychism）の問題がある。現実的存在が適用される全てのものは経験の活動として何らかの「経験」を有する、そういった「経験」の主体なのである。これは方法としては想像的一般化の一つの例となる。人間経験を元にそれを一般化して無生物の「経験」さえも規定しようとする。しかしその結果、人間や生物はともかく机や椅子などの無生物も「経験」を有するという常識的には理解しがたい主張が帰結する。実際ホワイトヘッドは無生物でさえもまた何らかの意味で生きている、それゆえ自然は全て生きた存在であるということを主張しようとした。しかしここにこそむしろ、生き生きとした自然を取り戻そうとするホワイトヘッドのコスモロジーの意義がある。もっともこの問題に関してはここではこれ以上は触れない。

むしろわれわれが問題にしたいのはわれわれ人間の経験である。通常それは椅子や机の知覚といったことが考えられる。しかし「経験」というのであれば、ホワイトヘッドがコスモロジーを探究する、その探究することそれ自体もまた「経験」ではないのか。言いかえれば、「コスモロジーを探究すること」それ自体も「経験の活動」として現実的存在と見なせないのか。一方現実的存在それ自身はホワイトヘッドのコスモロジーの探究の結果として生み出された宇宙の生起に適用されるべき範疇である。しかしその範疇が今度は「ホワイトヘッドのコスモロジー探究」それ自体に適用される可能性はないのか。ここに現実的存在の自己言及（self reference）の問題が生じてくる。

ここでの「自己言及」とは、文や語が自分自身に言及するという言語学的なものをより一般化したものである。例えば、自己が何かを経験する時、そういった何かを経験している自己自身の経験とはどういったものか、といった問題に関係する。そしてわれわれが問題にしたいのは、コスモロジーの探究というホワイトヘッド自身の経験である。即ち1920年代にアメリカでホワイトヘッドがコスモロジーを探究するという経験に、その探究の結果として生じた「現実的存在」という範疇を適用することができるかどうか、ということである。本来この範疇はホワイトヘッドのコスモロジーの探究の対象、即ちホワイトヘッドという主体の経験に対する客体に適用されるべきものであるが、コスモロジーを探求するホワイトヘッドという主体の経験それ自体に適用される可能性があるのかが問題なのである。

さらに先に述べた客体的不死性なども考慮に入れれば、今われわれのこの論文の考察もまた、ホワイトヘッドのコスモロジーの範疇を使って自己言及的に考察することができる。即ちホワイトヘッドの探究の成果としての彼の著書『過程と実在』の記述は、ホワイトヘッドの1920年代のコスモロジーの探究という経験が「消滅」してホワイトヘッドの記憶という客体的不死性を有した実在的可能態になった。その実在的可能態から『過程と実在』の執筆というホワイトヘッドの経験、即ち現実的存在が生成した。その『過程と実在』の執筆という現実的存在が「消

滅」して客体的不死性を有したものは、一連の文字があるという形で他の人の経験―現実的存在に対する実在的可能態となった。そういった一連の経験―印刷、翻訳等々の多くの人々の経験、即ち現実的存在―の一連の系列の最終的結果として今の私、平田一郎（それ自身はまた人格としての過去から現在の平田一郎という別系列の現実的存在の集まり―これをホワイトヘッドは「社会」[society]と称する―の最先端にある）の目の前に『過程と実在』のテキストがある。そのテキストからの私のホワイトヘッド研究という経験を、現実的存在とその消滅としての記憶、そういった記憶の記述等々という形で、全て一連の現実的存在の生成と消滅（客体的不死性の獲得とそれを元にした新たな現実的存在の生成）という形で説明できる。

こういった解釈は可能であろうか。確かにコスモロジー探究それ自身を現実的存在であると言及したテキストは存在しない。しかし次のような記述はある。

> 主体は、与えられた条件から、またそのまっただなかで創られる。科学は、思考をこの根本的な事実と和解させ、宗教は、その過程に含まれている思考をその同じ過程に含まれている感性的な反応と和解させる。この過程は経験する主体そのもの以外の何ものでもない（*PR* 16）

ここでの「主体は、あたえられた条件から、またそのまっただなかで創られる」という言い方はまさにホワイトヘッドの現実的存在の生成を表わしている。実際ホワイトヘッドの現実的存在の経験の主体としての特徴は、「主体がまずあってそれが経験する」という図式を打ち破ったことにある。むしろ客体から主体が形成される。それが現実的存在の生成なのであり、ここで科学と宗教を挙げていることが重要である。主体があってそれが科学的探究や宗教的経験をするのではない。科学的探究をする主体、宗教的経験をする主体が「創られる」のである。そしてこの創られる過程こそ「経験する主体そのもの以外の何ものでもない」。これは明らかに科学的探究や宗教的経験のような人間の知的活動もまた、科学的探究をする主体という現実的存在の生成、宗教的経験をする現実的存在の生成という形で現実的存在が適用されていることを示している。

さらに哲学（philosophy）に関してホワイトヘッドは言う。

> 哲学は、宗教および科学―自然科学であれ社会に関するものであれ―と緊密に関係することによって、非有効性という汚名から脱する。哲学は、この両者すなわち宗教と科学とを、一つの理性的な構図に融合することによって、最も重要なものとなる（*PR* 15）

ここでの「哲学」とは『過程と実在』の第一章「思弁哲学」（speculative philosophy）にお

いて言及されたものであり、それゆえ思弁哲学に他ならない。そして『過程と実在』でのコスモロジーの探究を正当化するために、最初に思弁哲学を正当化しているのであるから、ここでの哲学＝思弁哲学はコスモロジーの探究ということになる。そのコスモロジーの探究が宗教と科学の融合、即ち宗教的経験と科学的探究を融合して経験するということであるから、宗教的経験と科学的探究を、客体的不死性を獲得した先行する多なる現実的存在として見なして、その上で、コスモロジーの探究はそこから生じる新たな現実的存在ということになる。即ちコスモロジーの探究もまた「経験する主体そのもの以外のなにものでもない」し、「与えられた条件から、またそのまっただなかで創られる主体」に他ならない。即ち現実的存在はコスモロジーの探究それ自体にも適用される。

さらに現実的存在の特徴がコスモロジーの探究そのものの特徴と同じである別の事例もある。ホワイトヘッドの宇宙は、静的であることを否定して動的であることを強調する。それはまさに現実的存在が「もの」ではなく、「こと」、それも生成する生起として何よりも「過程」としてとらえられていることに根拠がある。そしてこういった現実的存在の過程としての動的性格は、コスモロジーの探究それ自体においては、コスモロジーの過程的性格、即ちコスモロジーにおける永遠不変の真理の否定、常に変更可能であり、あるいはむしろ修正していくべき在り方として現れている。「哲学［コスモロジーの探究］はけっしてこれらの形而上学的な第一原理を究極的に定式化することを望んではならない」（*PR* 4）。

以上により、ホワイトヘッド自身は明示していないにせよ、明らかに現実的存在という経験する主体の形成は、コスモロジーを探究する主体にも適用されることは明らかである。即ち現実的存在というホワイトヘッドのコスモロジーの探究の結果生じた範疇は、コスモロジーの探究それ自体にも適用される、自己言及的な性格を有する。

確かにこういった自己言及性はその探求の過程で自己自身の立脚点を掘り崩し、その成果を不安定化させるかに思われる。しかしそういった不安定性をあえて引き受けるところにホワイトヘッドのコスモロジーの意義がある。彼が宇宙の「過程性」を強調し、それが自己言及的にコスモロジーの探求それ自身の過程性へと導かれるとき、それは静止して安定した真理の追求を最初から放棄しているということを示している。しかしこの過程性は全てをカオスに放り込むことにはならない。むしろこの自己言及的な過程性は自己言及的な累積性と結びつき、哲学の「前進」（advance）をもたらす。こういったあり方は、ホワイトヘッドのヨーロッパ哲学の歴史についての見方にも顕著に現われている。即ち「ヨーロッパの哲学の伝統についての最も一般的な特徴づけは、それがプラトンの脚注から成り立っている」（*PR* 39）と同時に「哲学はプラトン以来前進してきた」（*PR* 7）のである。

そしてこの自己言及的な累積性は、現在のホワイトヘッド解釈において画期的なL.S.フォードの「構成的分析」（compositional analysis）[3)] の問題にも関わる。そこではフォードによって

ホワイトヘッド・コスモロジーの欠陥として考えられていたものが、むしろホワイトヘッドのコスモロジーにおける宇宙の累積性の表れとして積極的に評価できる。それゆえ構成的分析について考察しよう。

3．構成的分析（compositional analysis）

ホワイトヘッドの主著である『過程と実在』において一貫せず、矛盾する部分が多いということは良く指摘されてきた。例えば「主観主義原理とは、経験の活動における与件を純粋に普遍によって適切に分析できる、ということである」（*PR* 157）としながら、その同じ章の後の部分では、何の注記もなく「主観主義原理とは、宇宙全体は主体の経験の分析において露わにされた諸要素からなる、ということである」（*PR* 166）とする。あるいは「観念的逆転の範疇」について、「神の創造的行為の性格描写を承認することでいっそう完全な合理的説明が達成される」（*PR* 250）ときに「廃棄される」（*PR* 251）と主張している。しかるに彼はその後の記述においても（例えば第三部第五章第八節）そのような完全な合理的説明をせず観念的逆転の範疇を使い続ける。

こういったホワイトヘッドの記述の矛盾を彼が「異常なほどに大胆にいつも新しいアイディアを求めていた」[4] からだ、とするのがフォードである。フォードは、絶え間ない改訂と再構成がホワイトヘッドの哲学を複雑なものにした一方で、「そういった発展のために、異なったパースペクティヴから構成された諸部分の間に非一貫性と不調和が存在することになった」[5] と主張する。しかもホワイトヘッドはいったん書きあげると、より以前の観点からの部分を削除したり広範に改訂したりすることなく、ただ新しい観点からその部分を解釈できるような文を挿入するだけだった、そのようにフォードは考える。ただしこういった状況についてフォードは次のようにも言う。「たとえこのことが欠点であるにしても、それは、絶えず新たな洞察を求め、把握できないものを把握するために現在の洞察を超えていく、彼の才能ゆえの欠点である。もしも彼が新たな洞察の元で既に書いたものを絶えず書き直していこうとしたなら、決して何もなしえなかっただろう」[6]

そういった状況であるために、あるテキストが全体として一貫した考えを提示していると想定して、できるだけそのテキスト全体を矛盾しないよう体系的に解釈していくという、哲学のテキストに通常なされる「体系的分析」（systematic analysis）に基づく体系的解釈はホワイトヘッドのコスモロジーの解釈方法としては不適切である、とフォードは主張する。むしろホワイトヘッドがその著作を構成していく内的順序を決定していく「構成的分析」こそが、ホワイトヘッドのコスモロジーの解釈で重要であるとする。

こういった「構成的分析」は既にアリストテレスやヘーゲルの研究において先例があるが、

ホワイトヘッドの場合他に無い特有の事情がある。ホワイトヘッドは草稿、ノート等その著作の構成についての証拠となる歴史的資料をほとんど残さなかった。例外的に『過程と実在』の元になったギッフォード講義の便覧とそれに関する手紙等があるが、非常に量が少なく参考になりがたい。それゆえそういったものを元にしての構成的分析は実質不可能と言ってよい。

そこで、『過程と実在』において考えを転換してもホワイトヘッドは全面的に書き換えることがなくそれゆえ不一致が生じている、という先にのべた状況が重要になってくる。実はそのことが、公刊された著作からのみでの構成的分析を可能にする。実際フォードはこれに関して巧妙な方法を考案し[7]、それによって『過程と実在』の思想にいくつかの層を見出す。ここで重要なのは、『過程と実在』の元になったギッフォード講義[8]の草稿と、完成したテキストとの関係である。実際ギッフォード講義をする一年前の1927年夏にはほぼ独立した一貫した形而上学の体系が九と二分の一章の草稿として成立していた、ということがその時期の手紙で明らかになっている。その上で一年近くの改訂を重ねて1928年６月に残っているギッフォード講義の便覧にある形で実際の講義をして、さらにそれに27年夏以前に書かれた素材を加え多少の改訂をして29年１月に『過程と実在』の最終的な原稿を出した、というのがフォードの想定する『過程と実在』のおおまかな成立事情である。すると重要な転換は27年夏以後に起こったことになる。実際にされたギッフォード講義が現存の『過程と実在』のテキストとほぼ同じであることが便覧から確認されるからである。それゆえ27年のギッフォード草稿と現在のテキスト（28年に実際になされたギッフォード講義と刊行された『過程と実在』）という、前期思想と後期思想の区別、前者から後者への「転換」（shift）が重要なものとなる。

その区別は現存の『過程と実在』のテキストでは、概ね第二部と第三部の違いと重なるとされる。即ちギッフォード草稿によるものが第二部であり、後の完成した思想が第三部のものとされる。ギッフォード草稿による前期思想は、多なる与件（data）が移行（transition）によって単一の与件（datum）へと統一され、その次に合生（concrescence）がこの統一的な与件に対して主体的に反応して現実的生起が生起するという考え方である。このように移行と合生を対比して、前者を作用因によるもの、後者を目的因によるものとする。このように過程を幾段階にも分けるというのは現代ではJ.L.Noboの体系的解釈[9]に近い。言いかえればNoboは（自身はそう意識していなくとも結果的に）より前の思想に注目してそこからホワイトヘッドを体系的に解釈していることになる。また前期の思想には、神が過程に関わる形而上学的な原初的本性（primordial nature）のみしか考えていない、という特徴もある。もっともこれについてNoboは次にいう神の結果的本性も認めており、彼の解釈は前期思想と異なっている。一方今われわれがホワイトヘッドのコスモロジーとして認識しているような思想は、基本的に後期の思想と言ってよい。実際伝統的なW.A.クリスチャンの体系的解釈[10]によるものなどがそれに当たるとフォードは主張する。移行は合生の初期の部分の別名であって基本的には合生の

一段階のみが考えられている。その代わり合生についてより綿密な分析がなされ、人間経験に近いより高度な相の分析もある。また神の原初的本性に、われわれの救いに関わる結果的本性（consequent nature）が付け加えられている。

このように体系的解釈が一つの思想と見なすところを、構成的分析に基づく構成的解釈は複数の思想の変遷と見なして、どのように変遷したかを述べる。例えばホワイトヘッドの神についての概念が原初的本性と結果的本性から成ると言わずに、原初的本性のみの神概念というものをテキストから復元して、それがどのように変えられて二つの本性から成る現在の体系が構成されたかを述べる。そしてこのようなフォードの解釈は非常に説得的である。とは言え、ギッフォード草稿の梗概が残っていない以上、それはかなり蓋然的なものにとどまるというのも事実であろう。しかしそれ以上に、ある意味でホワイトヘッド自身がこういった前期思想から後期思想への変遷を充分に認識していた節がある。ホワイトヘッドは言う

> ［自らのコスモロジーが］成功しているか否かの一つの試金石は、経験の多様性を理解するに際して、諸観念からなるある一つの図式の限界内で十全であるか否かということである。この条件を満たす努力は「自然の秩序」、「主観主義原理」、「過程」とそれぞれ名づけられた第二部の第三、七、十章を「経験の高次の諸相」という第三部第五章、「測定」という第四部第五章、「神と世界」という第五部第二章とそれぞれ比較するならば、そこに例証されている。これらの章は、第一部第二章で述べられた諸観念からなる一つの図式の、道理にかなった所産として認められるべきであろう（*PR* XIV）。

ここで比較すべきだと言われている部分は、前期思想と後期思想の対応する章であるといってよい。従ってこの言明は一方で、ホワイトヘッド自身が、構成的分析によって示されるのに類するある種の思想の変遷があったことを認めている、という事を示唆する。しかし他方、その変遷の結果は、「転換」という言葉によって示されるような前の立場を廃止するようなものではなく、前の立場と後の立場の双方が「一つの図式」の例証となっているのだとホワイトヘッド自身は考えていた、という事もこの引用は示している。

このように変遷した前のものも後のものも全てを導出しうるような一般的で広範な図式を形成することがホワイトヘッドのコスモロジーなのである。こういった広範な図式は、特にその広い十全性といった点から「母型」（matrix）とも言われる。

> ［哲学の］図式（scheme）は、定式化されない留保条件、例外、制限、一層普遍的な概念による新しい解釈を伴ってこそ真なのである。われわれは今もなお、その図式を論理学的真に作り直す術を知らない。しかしその図式は、そこから特殊な環境に適用可能な真なる

命題が導出されうる母型なのである（*PR* 9）。

確かに「論理学的真に作り直す」ことができない、つまり表面上は矛盾があるように見えるかもしれない。しかしこの矛盾は、そういった思想を適用する場合の「定式化されない留保条件、例外、制限、一層普遍的な概念による新しい解釈」を伴っていないから生じるのであろう。

逆に言えば、これら「定式化されない留保条件、例外、制限、一層普遍的な概念による新しい解釈」によって、後期思想の観点から前期思想を一貫して解釈できるのではないか。さきに述べられた特徴について考えれば、前期思想は特に自然科学を取り扱った『科学と近代思想』を受けて、物理的な生起が主として考えられているのかもしれない。その場合作用因が重要な位置を占める。しかし一方で物理的生起では余り表に出ない目的因もまた、自然が機械論的な運動のみではないことを示すため認めねばならない。それゆえ両者が対比的に取り扱われた。ただし現存のテキストでは両者が別の過程であるということは読み取れない。一方後期思想ではより高度な人間経験に主眼が置かれる。だからこそ高度な相の分析が大きくなると共に、作用因も合生の中に繰りこまれることになった。実際人間経験においては意図的行為に典型なように、作用因と目的因を段階で分けることは困難である。また神についても、形而上学的な役割を論じることと、それに救いなどの役割を付加することに何の矛盾もない。

そしてこのような図式の十全性ということについて、われわれが先に述べた累積性が重要になってくる。コスモロジーの対象である宇宙の諸要素が累積的であると共に、自己言及により、コスモロジーの探究そのものも累積的なのである。言いかえれば、前期思想に後期思想が積み重なる。そしてその場合前期思想は廃止されることは無い。むしろ前期思想に後期思想が追加され、それゆえより包括的広範な、思想として「増加された」ものとなったのである。他にも中期の科学哲学に由来する「延長の理論」が『過程と実在』の第四部として前期思想の第二部、後期思想の第三部に積み重ねられる。あるいは第二部それ自身、前期思想の中においてさえも、『科学と近代世界』におけるサブアトミックな存在に対する現実的生起の適用の上に、『象徴作用』の知覚論が積み重ねられている。そしてだからこそ、ホワイトヘッドはフォードが認めたようなやり方をとった。即ちいったん書きあげると、より以前の観点からの部分を削除したり、広範に改訂したりすることなく、ただ新しい観点からその部分を解釈できるような文を挿入するだけなのである。そういったやり方はまさに宇宙の累積的性格に対応している。その限りでコスモロジーの探究は累積性という点からも確かに現実的存在の一例となっている。

こういったコスモロジーの探究それ自身の状況はまさにコスモロジーの対象として宇宙の在り方においても認められる。特に「対比」（contrast）は累積性という点で重要である。即ち対比されることによって新たなものが生じるが、対比される前のものは決して削除されない。その点でヘーゲルの弁証法の「総合」（Synthese）において、「定立」（These）と「反定立」

（Antithese）が抹消されるのと対照的である。そして対比という言葉を使えば、前期思想と後期思想の対比こそが母型としてのホワイトヘッドのコスモロジーに他ならない。この対比において前期思想は削除されず、その上に後期思想が累積する。

さらにコスモロジーの対象についての次の言葉も、コスモロジーの探究それ自身のあり方に示唆的である。

> 新しい条件はどれも、追加された豊かな達成に吸収される。他方、それぞれの条件は、排他的であり、多様性に耐えられない。ただ例外は、それが排除するものを対比へと転換する諸条件の網状組織（a web）の中に自分を見出す場合である（*PR* 223）

ホワイトヘッドはこの「例外」を充分に意識していたのであり、そこでの「網状組織」とは、コスモロジーの探究それ自身において「母型」といわれたものに他ならない。この点でもホワイトヘッドのコスモロジーの累積的性格を、コスモロジーの探究それ自身に見出すことができる。

4．空間的累積性

このように累積的性格は、コスモロジーの対象とコスモロジーの探究それ自身に共通する。そしてその場合のコスモロジーの対象の累積性とは、実は時間的な累積性であった。即ち過去の多なる現実的存在が消滅した後客体的不死性を得て、それを所与として現在の一なる現実的存在が生じる。そしてその生成の終わりに、一なる現在の現実的存在は消滅して客体的不死性を得ると共に客体的に不死な過去の多なる現実的存在の上に積み重なる。言いかえれば現在の一なる現実的存在が得た客体的不死性が、過去の多なる客体的不死性を増加させる。そしてこの増加した客体的不死性が次の一なる現実的存在の生成のための所与となる。このようにして過去に現在が積み重なり、その積み重なって増加したものが新たな過去になって未来、即ち次の現在のための所与となる。

しかしこういった時間的な累積性の他に、空間的な累積性も考えられる。即ち空間的に同じ場所に複数の現実的存在が積み重なる。これは常識的な「もの」の不加入性を考えれば、ありえないことと思われるかもしれない。しかしホワイトヘッドの現実的存在は、先に述べたように「こと」である。そして「こと」は重なり合いが可能である。例えばある種の「場」という形で考えれば、場の重なり合いというのはありうる。あるいはむしろ複数の「こと」が重なり合っていると見なすことができるかもしれない。例えば「ピストルの引き金を引く」時、それが同時に「拳銃を発射する」ことであり、「Aを殺す」ことでもあるならば、「ピストルの引き金を引く」ことは「拳銃を発射する」ことや「Aを殺す」ということに延長されると共にそれ

らが（一部分）重なり合っていると見ることも可能である。

しかし、ホワイトヘッドのコスモロジーについての標準的な解釈は、そういった現実的存在の空間的重なりあいを認めない。むしろ現実的存在をサブアトミックな極端に小さな存在と考える[11)]。確かにホワイトヘッドの記述には現実的存在をミクロなものとする記述がある[12)]。そして標準的な解釈においては、そういったミクロな現実的存在同士は、「もの」と同じく相互に不加入であり、あらゆるものは全てそういったミクロな現実的存在の集まりとしての「社会」（society）であるとする。こういった標準的な解釈は、まさに自然科学が素粒子などの微粒子の集まりとしてあらゆるものを考えるのと軌を一にしている。もっともこのような標準的な解釈においては、そういったミクロな現実的存在は、先ず直接的な社会としては電子や原子核を作り、そういった電子や原子核の集まり、社会の社会として分子を作り、そういった分子の集まりとしての社会の社会の社会として細胞を作り…といった形を取ると考えられている。それゆえ、社会の上に社会の社会、社会の社会の上に社会の社会の社会が積み重なっていくという形での累積性は認められる。

もっともこのような自然像はそれほど魅力的であるようには思えない。何よりもホワイトヘッドのコスモロジーにおける魅力であり、問題ともなっている汎主体主義、汎心論がミクロなサブアトミックのレベルの問題としてわれわれには直接は縁の無い世界の話となり、それほど大した意味がなくなる。さらに『過程と実在』におけるあの広範な現実的存在の機能についての理論がわれわれの日常生活には全く無縁のものとなるし、特にそこで現実的存在について言われていること、例えば自由や責任といったことも、われわれの日常的な生活と無縁のものになる[13)]。

こういった中で、唯一日常的なマクロな存在―椅子、机、さらにローマ帝国や星雲さえも―もまたミクロな存在と共に現実的存在であるとしたのがF.B.ウォラックであった[14)]。彼女は、「何であれ具体的なもの全て」（any concrete existent whatever）が現実的存在であると主張した[15)]。この解釈によれば、確かに空間的累積性も認められることになる。実際サブアトミックな現実的存在の上に電子としての現実的存在が累積し、電子としての現実的存在の上に分子としての現実的存在が累積し…という形で最後は星雲まで至ることになる。そして実際彼女が挙げた『過程と実在』におけるテキスト上の根拠は圧倒的であった[16)]。無論サブアトミックな存在も現実的存在であることは認めるから、通常の解釈がよって立つ根拠もそのまま認める。しかし通常の解釈はどういうわけか、ウォラックが挙げているホワイトヘッドがマクロな存在もまた現実的存在であるという記述を無視する。

それはマクロな存在としてウォラックの挙げた部分は理解しやすくするための比喩として、字義通りに取るべきではない、という主張による。それに対してサブアトミックな存在としているホワイトヘッドの記述をより重視すべきであるという[17)]。しかしホワイトヘッドのある記述を字義通りは取れず、比喩として考え、別の記述は字義通りとるべきだということの根拠は

どこにあるのであろうか。

そういったホワイトヘッドの記述の区分けについて論じたのがクリスチャンの「前体系的言語」(presystematic language)、「体系的言語」(systematic language)、「後体系的言語」(postsystematic language) の区別であった。クリスチャンは言う。「いくつかの節で、ホワイトヘッドは彼が自分の基礎的なデータとした具体的な経験を喚起し記述する。これをわれわれは前体系的言語と呼んでもよい。別のところでは彼は自らの範疇的図式を作り上げる概念を構築し展開している。これを体系的言語と呼んでもよい。さらに他の所で彼はこれらの体系的な用語を感覚経験や自然の秩序、芸術、道徳、あるいは宗教を解釈するのに使っている。ここで彼は自らの図式を適用しているのであり、これを後体系的言語と呼んでもよいかもしれない」[18]。

そしてウォラックを批判する人々は明らかに現実的存在のマクロな存在に関する記述は前体系的言語と考えている。それは、ホワイトヘッド自身自らの体系を形成する材料として使ったものであり、その材料を元にして、それを想像力によって一般化して体系を作る。しかしそういった想像力の一般化は、逆に言えばもはや材料に体系が適用されるものではない、ということを意味する。例えばマクロなものについてのわれわれの経験を想像力によって一般化して微小なものを主体とする経験とした時、マクロなものについての経験は決して体系化された「経験」と同じではない。ただわれわれにとってはそういったホワイトヘッドの「内幕」を知ることで、現実的存在とは何かを理解するのに有用なだけである。それに対してミクロな存在に関する記述は後体系的言語として、その体系の適用について記述している。従って現実的存在はミクロな存在、サブアトミックな存在にのみ適用されるべきだ、とされる。

しかしこういったクリスチャンの区別について、何らかの根拠があるのであろうか。実はホワイトヘッドの有名な「航空機の比喩」がその根拠になるとクリスチャンは主張する。「航空機の比喩」とは次のようなものである。

> 真の発見の方法とは航空機の飛行に似ている。それは個々の観察の大地から出発する。そして想像力による一般化という希薄な大気圏へと飛翔する。さらに理性的解釈によって鋭敏にされ更新された観察のために再び着陸する (*PR* 5)。

ここで離陸前の観察の大地の記述が前体系的言語、大気圏での飛翔が体系的言語、再度の着陸が後体系的言語とするのは自然であるかに思える。しかしもしそうなら、後体系的言語の後では前体系的言語は無用のものとなるのだろうか。少なくとも後体系的言語における記述を前体系的言語に優先すべき、ということになるのか。

しかしそもそも前体系的言語と後体系的言語の区別は存在するのか。ホワイトヘッド自身は非体系的言語を第二部の記述として、体系的言語を第三部や第四部の記述としている[19]。しか

し前体系的言語と後体系的言語の区別について何も言っていない。さらに航空機の離陸は一度だけだろうか。体系を適用しても、体系を適用したことにより理解が深まり、それをもう一度体系形成にフィードバックするということは無いのか。もしそうなら、それは二度目の離陸ということになる。しかし二度離陸するとなると、そこから二度目に離陸した、最初の着陸地は「前体系的」なのか「後体系的」なのか。最初の着陸地も二度目の着陸地のどちらも体系を適用したという点に変わりはない。確かに二度目の着陸地の方がより認識も鋭く、進んだものとなっているのかもしれない。しかしだからと言って一度目の着陸地への体系の適用を否定することはできない。例えば一度目の「着陸」でマクロな存在を現実的存在としたとして、そこからの想像的一般化によって二度目の「着陸」でミクロな存在の適用を考えたとしても、一度目の「着陸」でのマクロな存在を現実的存在とするそのことを否定することにはならない。

そして思想の累積という点からもまた、前体系的言語による記述であろうが後体系的言語による記述であろうが、一方を他方に優先することはできない。なぜならたとえ前体系的言語による記述であろうと、後体系的言語による記述は前体系的言語による記述を否定したり、削除したりするのではなく、前体系的言語による記述を含むように、あるいはその上に累積するようにコスモロジーが解釈されねばならない。あるいはむしろ前体系的であれ後体系的であれ、体系は双方を含むような母型、網状組織でなければならない。そうしたことから、優先順位につながるような形での前体系的、後体系的の区別は無用のものであろう。日常的なマクロな存在に現実的存在が適用される記述も、サブアトミックなミクロな存在に現実的存在が適用される記述も、非体系的言語による記述として同等に扱われねばならない。

5．ミクロコスモスとマクロコスモス

もっとも通常の解釈をする人々でも、ホワイトヘッドの「人間経験」(human experience)を現実的存在の一例とするということについては否定できない。実際ホワイトヘッドのコスモロジーには人間経験の探究という側面もある。というよりもむしろ、現実的存在を「経験の活動」とすることから明らかなように、人間経験を一般化してあらゆる生起を何らかの経験の主体と考えるというのがホワイトヘッドのコスモロジーである。従ってホワイトヘッドの体系は何よりも先ず人間経験を説明できるものでなければならない。そうでなければ、一般化の基礎が崩れ、コスモロジーの体系全体が崩れてしまう。

そして人間経験とは常識的に考えれば決してサブアトミックなミクロな生起とは思えない。従って通常の解釈に立っても、ミクロな存在と人間経験に現実的存在の適用がなされると主張し、その限りでミクロな存在のみを現実的存在とすることに反対する解釈者もいる[20)]。しかし人間経験もまたサブアトミックな生起とする解釈が一般的である[21)]。その根拠となるのは「心

理学的生理学」（Psychological Physiology）と称されるホワイトヘッド自身の人間経験についての記述である。「『心理学的生理学』は、あるいは無機的装置からの抽象において、あるいはその結合体（nexus）の無機的装置への反応に関して、またあるいは結合体相互の反応に関して『完全に生きている』結合体と取り扱おうと試みている」（*PR* 103）。ここでの「結合体」とは現実的存在の単なる集まりであり、その結合体に何らかの秩序が入ると「社会」となる。そして「心理学的生理学」はまさに社会でなく、結合体として「生きている」ということを取り扱う。それは次のようにしてである。

さて「生きている」という生起は、例えば細胞一つの「生きている」という生起においても、何らかの無機物、原子や電子等をその傘下においている。そういった傘下の無機物はある確固とした秩序を持つ社会である。それゆえ「生きている」という生起は諸々の社会からなる。そしてこの「生きている」という生起は、例えば細胞それぞれに対応している。即ち細胞一つ一つが「生きて」いて、しかもそれが集まって一つの生物の「生きている」ということが生じている。従ってある生物が「生きている」ということは、細胞一つ一つの「生きている」生起の集まりである。しかしこれは結合体であって社会ではない。なぜなら「生きている」ということは、個々の細胞の「生きている」生起の総和を超えた新しさ（novelty）を有する。そしてその限りで一つの生物が「生きている」ということは、無機物のような一定の秩序に従った固定的なものではない。それゆえある生物が「生きている」ということは、無機物のような秩序をもった社会ではなく、秩序をもたないため「結合体」と呼ばれる。

しかしこの結合体は、一つの生物が「生きている」ということである。一つの生物が「生きている」ということは、諸々の細胞の「生きている」生起の単なる総和ではなく、それらを統括する一つの「生きている」ということである。確かにある生物の一つの「生きている」ということは、その支配下に諸々の細胞の「生きている」生起を有する。それからこういった一つの「生きている」ということは一つの「こと」であるため、結合体ではなく現実的生起、即ち「支配的生起」（regnant occasion）と呼ばれ、他方その支配下の諸々の細胞の「生きている」生起の結合体は「従属的結合体」（subservient nexus）と呼ばれる。

この図式の中に「人間経験」を位置づけるとどのようになるのであろうか。人間経験とはその人が何かを経験することであるが同時にその人が「生きている」というそのことに他ならない。従って「人間経験」を支配的生起と同一視できる。さらにそういった支配的生起に従属する結合体は、脳ということになる。実際脳細胞の活動はその一つ一つが生きている生起であるし、「多くの身体の活動は、多少独立に行われるが、脳髄における極めて高度な性格の中枢的統御の器官をもって行われる」（*PR* 108）からである。即ち心理学的生理学においては、人間経験は脳髄の中の、その脳髄という結合体を支配する、支配的生起に他ならない。このように考えれば、人間経験を脳髄の中に生じるミクロな、サブアトミックな生起と考えることができ

るし、人間経験はその意味でサブアトミックな現実的存在の一例となる。実際ホワイトヘッドは言う。「心理学的生理学の若干の根本原理を推測することは、有機体の哲学のコスモロジーに光を投げかけるだろう」（*PR* 103）。

さらにホワイトヘッドのコスモロジーの図式では、人間経験は身体経験（bodily experience）を継承して生じる。実際人間経験は身体が原因となって生じるのであるが、ホワイトヘッドの図式では、そういった直接の原因となる生起は同時に直接的過去でもある。即ち人間経験の直接の過去として身体経験が考えられることになる。そして心理学的生理学においてこの身体経験は脳髄の経験に他ならない。なぜなら脳髄を継承して脳髄の中の支配的生起としての人間経験が生じるからである。実際「この支配的生起の経路は、おそらく物質的な分子から分離した脳髄の部分から部分へと迷走する」（*PR* 109）。

しかし厳密に言えば、心理学的生理学において人間経験と同一視される支配的生起は、サブアトミックな、即ち電子や原子核がその集まりである社会とされるような大きさではない。確かに電気的な生起ではあるが、脳髄の神経細胞の電気的な励起として、細胞大の大きさの生起である。それはサブアトミックどころか、電子や原子核に比べてもはるかに時空的にスケールの大きな生起である。さらに心理学的生理学は、ホワイトヘッドのコスモロジーの範疇的図式の唯一の解釈でもなければ、唯一の適用事例でもない。

一方物理学においては、現実的存在は実際サブアトミックなスケールの生起である。他方人間経験に関しては、例えば、知覚論に関する現象学的探究がある[22]。実際因果的効果（causal efficacy）や表象的直接態（presentational immediacy）、そしてそれらを媒介する象徴的指示（symbolic reference）を巡る議論は先に述べたように『象徴作用』の議論を取りいれたものであり、人間経験に関して、心理学的生理学のような自然科学的アプローチというよりもむしろ現象学的なアプローチというべきである。実際、心理学的生理学では脳髄の経験であった人間経験の直接の過去である身体経験が、このアプローチにおいては、触覚経験については手、視覚経験については目が挙げられている。こういった手や目の経験を直接継承する人間経験が脳髄の中の微細な生起ではありえない。実際もしそうならそういった手や目と脳髄の微細な生起は神経細胞の生起が仲介するのであって、直接的過去とは言えないからである。この場合明らかにそういった手や目を直接意識するある種の現象学的経験が想定されている。さらに知覚論においては知覚の対象、即ち知覚経験を引き起こす客体的に不死になった現実的存在の所与として椅子が論じられている。言いかえれば、椅子が現実的存在と見なされているのである[23]。

これらはコスモロジーの対象の問題であると共に、そういった対象にどのようにアプローチするかということによる違いであるとも言える。実際心理学的生理学によれば現実的存在である人間経験は脳髄の細胞レベルにおける生起となるが、知覚論における人間経験は明らかにそうではない。また物理学の対象としての現実的存在はサブアトミックな生起であり、知覚論に

おける現象学的な探究においてはマクロな存在としての椅子や机（厳密には「椅子があること」や「机があること」）が知覚の対象として現実的存在と見なされる。このようにどのような探究をするかによってその探究の対象としての現実的存在は様々なレベルの大きさでとらえられる。

さらに個々の人間経験を超える探究とその対象がある。例えば次の一節を見てみよう。「一つの現実的存在は、他の現実的諸存在の間で、永遠的客体間の対比によっては全面的に表現されえない地位をもっている。例えば、ヨーロッパの歴史に対する古代ローマ帝国という複合的な結合体（complex nexus）は…」（*PR* 229）。ここで明らかに、古代ローマ帝国が一つの現実的存在と考えられ、ヨーロッパの歴史が現実的諸存在、結合体と見なされている。現実的存在と結合体との結合体であるがゆえに「複合的」と称されるのであるが、このことは次のように考えれば理解できる。即ちここでは文明論が議論されている。そして文明論を探究する主体にとって、古代ローマはこの探究の対象である。もしこの探究する主体が現実的存在であるとするなら、この複合的結合体は現実的存在の所与の全体―現実世界（actual world）と称される―であり、古代ローマは現実世界の一員であり、一つの探求対象としての現実的存在である。

さらに『過程と実在』第五部は、現実的存在である神についての理論である。第四部までは、個々の生起の観点からの対象としての神が扱われた。第五部では神の観点から主体としての神が取り扱われる。主体としての神にとって、客体は「世界」（world）である。それゆえ第五部第二章は「神と世界」と題される。この世界は個々の生起が経験する所与の全体としての「現実世界」の「世界」と通じるが、微妙に異なる。ともあれ第四部までは個々の生起の宗教経験が探究されたが、第五部においては神それ自身についての神学が探究される。

このようにして、ホワイトヘッドのコスモロジーの探求においては、物理学、生物学、心理学的生理学、知覚論、文明論、神学等々の累積がある。実際ホワイトヘッドは言う。

> 思弁哲学[コスモロジー]とは、われわれの経験のあらゆる要素が、それによって解釈しうるような、普遍的観念の整合的・論理的・必然的な体系を組み立てる努力である。（*PR* 3）

現実的存在はさまざまな分野の研究の対象である。むしろ現実的存在はさまざまな分野の研究の対象に適用しうる範疇として作られた、と言うべきであろう。

そしてさまざまな程度の大きさの現実的存在の累積が、さまざまな分野の研究の累積から帰結する。それゆえ、例えば現実的存在としての日常的な人間経験の生起は身体器官の生起の上に積み重なり、これら身体器官の生起が細胞の生起の上に積み重なり、細胞は分子に、分子は原子に積み重なり、究極的にはこれらはサブアトミックな生起の上に積み重なっている。他方人間経験を超えて、人間経験の上に通常言う意味での社会という生起が、その上に星雲、等々と積み重なる。さらに神は人間経験の上に積み重なっている。現実的存在とは、これら全ての

存在に適用できる範疇である。

コスモロジーの重要な特徴に、ミクロコスモスとマクロコスモスとの対応ということが言われる。例えば身体というミクロコスモスと宇宙全体というマクロコスモスの対応といったものである。そしてこういったコスモロジーの伝統にホワイトヘッドのコスモロジーも連なっている。即ちホワイトヘッドのコスモロジーにおいては、サブアトミックな生起から星雲、神に至るまで全てを現実的存在と見なせるのであり、その限りでミクロコスモスとマクロコスモスの同型性を主張していると言える。ここにホワイトヘッドのコスモロジーの意義がある。

このようにホワイトヘッドのコスモロジーにおいて累積性は、対象としての宇宙の諸対象の時間的、空間的累積性やそれらのミクロコスモスとマクロコスモスとしての対応、コスモロジーそれ自身の方法の累積やそのコスモロジーに物理学から文明論、神学に至る諸々の知的活動が累積されているといった形で、その根幹をなしている。

注

1）以下ホワイトヘッドのコスモロジーの主著である『過程と実在』からの引用による。テキストは、*Process and Reality: An Essay in Cosmology (1929)*, 1979 corrected edition, edited by David Ray Griffin and Donald W. Sherburne, New York: Free Press, 1979、[PR]。これは1929年に最初にアメリカでMacmillan版、イギリスでCambridge版として刊行されたテキストの校訂が余りにもひどいために新たに校訂されたもので決定版と言ってよい。なお翻訳に関しては、ホワイトヘッド,A.N.『過程と実在-コスモロジーへの試論』1,2（平林康之訳、東京、みすず書房、1983年）を参考にしたが適宜変更している。また山本誠作訳の松籟社『ホワイトヘッド著作集』における第十巻(1984年)、十一巻(1985年)の『過程と実在』の翻訳は、著作権の関係でFree Press版ではなくCambridge版によっている。

またホワイトヘッド哲学、特に主著たる『過程と実在』についての解釈史については、D.W.シャーバーン『「過程と実在」への鍵』（松延慶二、平田一郎訳、京都、晃洋書房、1995年）における拙稿「訳者解説」を参照。またホワイトヘッド哲学から派生して今やホワイトヘッド関連の研究における主流をなしているプロセス神学まで視野に入れた解釈史としては、G.R.Lucas, Jr., *The Rehabilitation of Whitehead* , Albany : St. Univ. of New York Pr., 1986, [RW], ch. IXを参照のこと。

2）ただし現実的存在を「机」といった日常的なマクロな存在に適用できるかどうかということについては、否定的な解釈が一般的である。しかし筆者はむしろそういったマクロな存在にも適用できるというところに現実的存在の重要な意義があると考える。本論文４節以後を参照。

3）Lewis S. Ford,*The Emergence of Whitehead's Metaphysics 1925-1929*, Albany : St. Uni. of New York Pr., 1984, [EMW]. さらにホワイトヘッド研究及びプロセス神学の専門雑誌、*Process Studies*にこの立場からの幾多の論文がある。

4）"Some Proposals Concerning the Composition of *Process and Reality*" *Process Studies* vol.8 no.3

（Fall/1978）p.145

5）EMW p.231

6）EMW p.231

7）EMW p.178

8）『過程と実在』はもともとスコットランドのエジンバラ大学で「自然神学」に関して有名な哲学者を招いて講義をさせるギッフォード講義が元になっている。

9）J. L. Nobo, *Whitehead's Metaphysics of Extension and Solidarity*, Albany: St. Univ. of New York Pr., 1986

10）W. A. Christian, *An Interpretation of Whitehead' s Metaphysics*, New Haven, Yale Univ. Pr.,1959, ［AIWM］

11）例えばフォードは、「彼の現実態の単位［現実的存在］は全て極端に小さい」（"Inclusive Occasions" in Process in Context, ed. E. Wolf-Gozo, New York : Peter Lang, 1988, p.107）と主張して、それゆえ生じる問題をInclusive Occasionというホワイトヘッドの理論の拡張によって対処しようとした。

12）例えばPR 39, 42他

13）そういった立場からホワイトヘッドの理論を批判したのがE. Polsである（*Whitehead's Metaphysics; A Critical Examination of Process and Reality*, Carbondale :Southern Illinois Un. Pr. ,1967, p.6-7）。

14）F.B.Wallack; *The Epochal Nature of Process in Whitehead's Metaphysics*, Albany : St. Univ. of New York Pr., 1980, ［EWM］

15）EWM p.7。ただしウォラックには、現実的存在が範疇であってそれ自体が存在ではなく何らかの存在に適用されるものである、という視点が欠けている。

16）EWM ch.1-2

17）例えば、RW p.161

18）AIWM p.5

19）*PR* xi-xii, 39, しかし第三部や第四部にも、非体系的言語による記述がある。

20）例えばA.H.Johnsonは *Whitehead and His Philosophy*, Lanham :Un. Pr. of America, 1983, pp.115-119において、この立場から注13で述べたPolsを批判している。

21）その例としてJohn B. Cobb, Jr., *Whitehead Word Book*, Claremont : P&F Press, 2008, を挙げることができる。これは斯界の権威者とされている著者による、標準的な解釈に立った正統的な入門書である。

22）PR part II, ch.VIII、これは心理学的生理学が論じられたch.IIIの後にある。なお現象学的記述については例えば因果的効果（causal efficacy）に関する*PR* 176の記述などがその例となる。

23）このようなマクロな生起を現実的存在とするホワイトヘッドのテキスト上の根拠については、注14で挙げたウォラックの研究が圧倒的である。

（ひらた・いちろう　短期大学部准教授）